

## 明代朱子学と崎門学の研究

細谷恵志

山崎闇斎『文会筆録』には明代理学者の言が採録されている。特に明代初期の朱子学者である薛瑄、丘濬、胡居仁の著述は『文会筆録』にたびたび引用されている。本論文は、明初のこれらの朱子学者の論説から、その学理を明らかにするものであり、山崎闇斎が明代朱子学を摂取した意義との学問の本質を解き明かすことを目的とした。

東洋哲学の中において朱子学は一つの大きな柱であるが、その始まりは決して順風なものではなかった。宋代朱熹の学説を時の社会・政治は受け入れなかった。時代のそうした風潮に抗いながら、後学の士に支持を受けつつ確立していったのが朱子学である。中でも明代初期の薛瑄、丘濬、胡居仁は朱子の学をそのままの形で概ね享受し、時代に即応し、実践的に朱子学を活用したのである。現代の学界においては、彼らが朱子以上出るものではないという評もあるが、なぜそうしたのかについての考察が充分になされていない。また、学問的な流れの中で巨視的に捉えられすぎ、明代初期の学問が看過され、宋代の朱子学、明代の陽明学という学問の枠から除かれてしまっているのが現状である。

薛瑄が程朱の学から学ぶところが多く、門人も山西、河南、河北におり所謂河東学派を形成するに至った。彼は『性理大全』を読み、これを自身の『読書録』を二十巻に記している。明代理学の開祖と称があり、心性の養う方法としては、性を求め、氣に性を求めるべきであると主張した。氣は万事万物、日常の人倫にかかわるのであるから道を学ぶものは日々の道德実践の中で、この性を養わなくてはならないとし、「復性」を提唱した。胡居仁は、朱子学が科举制度の道具となってしまう、その学問の本質を学ぶものがないことを嘆いた。つまり本来行われるべき「涵養」が疎かになっていたために、「主忠信」を以って先となす、「求放心」を以って要となし、誠敬、慎独、力行を提唱し、「存心」を批判したのである。厳しく清貧に徹し、毎日課題を立てて刻苦勉励したが、一生官には就かなかった。『居業録』を著し、朱子学の意味を真に理解し、それを今の人がいかに正しく理解し、それを実行するかということ力を説いている。朱子の唱える聖学の純然たる姿に帰すことに尽力した。丘濬も薛瑄、胡居仁のように朱子を踏襲・継承したが、とくに学問の道統ということを提唱していることがその特徴である。

闇斎は、薛瑄、丘濬、胡居仁の主張を的確に読取り、自己の学問の基盤を形成していったのである。明代初期の朱子学の特徴である朱子学の純化、真の学問の追究、その学問の道德的実践が社会に資するという考えを闇斎は理解した。朱子学の観念的思想は、庶民に強いるものではなく、まず政治を司る者に必要とされるものであった。江戸時代における朱子学は林羅山、林家によって官学としての地位を獲得していた。その学問は明の永楽帝の命によって編纂された『大全』を中心として研究をしていた。一方闇斎は朱子に帰ろうとし、純一なる朱子学を追究し、京都において崎門派は勢力を増大させていた。朱子の死

から四百年を経た日本において、朱子の学問のエッセンスを継承し、明代初期の学問を闇齋が享受したことは、彼の学問の到達点への基盤となったのである。明の『大全』によって時の学者は自由が利かなくなってしまう、明代の解釈に捉われてしまったことへの弊害と出世のための学問として朱子学を扱い真の学問でなくなったことを闇齋は批判を強めた。

江戸時代は漢学の影響が強かった。否、わが国上代より漢学が流入して以来、その影響は徐々に強まり漢学が正統の学問としてインテリに浸透していった。それまで持合わせていなかった日本人の倫理観は漢学によって多大なる影響が齎されてしまった。そうして江戸期を迎え漢学熱は大いに高潮したのである。闇齋もその一人であったが、その帰着するところは、無知蒙昧に朱子の道を尊信するのではなく、孔子の道を把握せんがためなりという明初の朱子学の学問の目的を理解し、引いてはわが国の神道を明らかにするという態度を闡明にした。

山崎闇齋の垂加神道は近世に於ける諸種の神道説の中でも極めて特殊な地位を占めている。この垂加神道は、朱子学すなわち宋学に於ける理気説の要素があり、寧ろ朱子学の基底の上に構想されたものと言える。闇齋は晩年に至り神道の唯一を主張しながら、その倫理説は儒教思想を継承したものであって、それを説くにわが国の古語を以てしているところが多く見受けられる。

山崎闇齋『文会筆録』一之二には、朱子の『家礼』についての記述が散見している。江戸時代、葬礼の研究が盛んであったが、『性理大全』所収の『家礼』や邱濬きゅうしゆんの『文公家礼儀節』は明の習俗が多く取り入れられているため浅見綱齋はその弊害を取り除き、朱子本来の『家礼』にしたものが、元禄丁丑季冬日刊行本の『家礼』である。浅見綱齋は元禄十（一六九七）年に『性理大全』版『家礼』の中の楊復らの附註を削除し、朱子の本文と註に校訂を施し刊行している。本論文に於いて崎門学に関する朱子の『家礼』の受容とその展開を詳述している。

闇齋の学問手法は朱子学の学問手法と同様、細かに解説をせず朱子そのものの言を伝承し孔子の道学へ帰るものであった。この思考が闇齋の学問の大成に大きな原動力となったといえる。江戸時代前期において明代初期の哲理を看得し、自らの学問の確立へと昇華させたということは意義深いものであるとし、再評価をせねばならないものである。

## 明代朱子学と崎門学

### 序文

- 序論
- 第一部
- 明代朱子学の動向
- 山西省河津市万荣県平原村薛氏家廟及び薛貞について
- 薛瑄について
- 薛瑄の思想
- 薛瑄の『読書録』とその修養説

- 薛瑄の理学について
- 薛瑄の政治哲学
- 薛瑄の心性論について
- 薛瑄の詩について
- 丘濬の『学的』における道統の意義について
- 胡居仁『居業録』に見る「心」について
- 第二部
- 山崎闇斎とその学風
- 山崎闇斎『文会筆録』に見る明代朱子学—『大学衍義補』を中心として—
- 山崎闇斎『文会筆録』に見る胡居仁の思想
- 山崎闇斎の教育思想と『大和小学』
- 山崎闇斎『關異』に見る倫理思想について
- 山崎闇斎の主敬思想と『敬斎箴』について
- 山崎闇斎と日本のこころ
- 第三部
- 『朱子家礼』について
- 我が国の婚礼に見る『家礼』の影響について
- 水戸の儒葬に見る『朱子家礼』の受容について
- 曲阜に於ける儒葬と我国の神葬 —朱子『家礼』との比較を通して—
- 水戸を中心とした神葬の淵源とその展開
- 結論

